

## 橋具

〔窓の須佐美〕是も京なる富家、七月十四日債を乞に人をやりけり、使の者あつめ得て歸とて、四條邊にておとしける、初昏過る頃なれば、つれたりつる一奴と共に、月影を當に、こゝかしこと尋ぬれども見へざりければ假橋邊まで歸りたるに、乞食一人立向ひ、そこには物を尋ねらるゝよしにや、若金子には候はずや、其員を承らば、先にひろひ置、主を求て返し申さんと、心まちにて居候といふ。

〔都紀行〕十五日〇文久四年四月四けふは中の酉の日にて、葵祭りとき、しに、日和もよきまゝ、友人と連れ立て、寺町通りより、鴨川の河原に出るに、葵橋とてけふ。一日の假の土橋かゝれり。

〔藻鹽草水邊〕橋 橋のけた。

〔續後拾遺和歌集十三〕戀歌の中に

をばたゝの板田の橋のこぼれなばけたよりゆかんこふな我せこ

人麿

〔散木弄譯集雜橋〕橋

朝夕につたふいたゝの橋なればけたさへたえてたぢろぎにけり

〔夫木和歌抄〕二十一 承安二年閏十二月東山歌合隔河戀

待ほどにいたゝのはしもけたくちばわたせなしとてとしをへよとや

登蓮法師

〔新名所繪歌合〕八十番 大沼橋 右

良惠

思ひさへうきて大ゐのはしばしら立朝ぎりのはるゝまもなし

〔新古今和歌集〕十七ながらのはしをよめる

忠峯

年ふれば朽こそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで

〔新勅撰和歌集〕十九謙徳公につかはしける

思ふことむかしながらの橋ばしらぶりぬる身こそかなしかりけれ

よみ人志らず